MEN'S Health
メンズヘルス

QOL疾患

排尿障害を考える
～前立腺肥大症～

すぐに命にかかわるわけではありませんが、生活の質（QOL）に大きな影響を与える排尿障害。放っておくと大きな病気につながったり、管を入れて生活しなければならなくなるなど、日常生活に大きくかかわります。男性の原因として多い前立腺肥大症について、平尾病院の百瀬均名誉院長（62）に聞きました。

百瀬 均 名誉院長

協力／平尾病院
橿原市兵部町6―28
☎0744・24・4700

60代で半数が自覚 排尿に関する症状

60代で約半数、70代で約70％の人が、何らかの排尿に関する症状を持っているといわれています。下部尿路症状、いわゆる排尿障害には3種類の症状があります。まず、尿を出しているときに感じる「出にくい」などの症状。次に、尿意を頻繁に感じたり、尿失禁などの蓄尿症状。また、残尿感など排尿後の症状です。中でも蓄尿症状はいつ起こるか分からない症状で、QOLに一番影響を与えます。

排尿障害にはさまざまな原因がありますが、中でも男性特有の前立腺肥大症はすべての症状の原因になります。

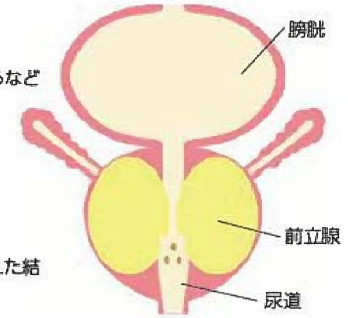
苦痛感じれば受診を 命にかかわる病気にも

前立腺肥大症とは、膀胱のすぐ下に尿道を挟むようにある前立腺が、加齢等の原因で大きくなることで起こる症状です。まず、尿道が圧迫されて狭くなる尿道閉塞（そく）となり、尿が出にくくなったり、途中で止まるなどの症状が出ます①。次に、尿道が狭くなることに対して、膀胱のポンプの働きが強まり、膀胱が過敏になり、尿が近くなるなど蓄尿症状が起こります②。ここまではQOL疾患といえますが、次に起こることは、膀胱のポンプの働きが落ち、残尿が増え、進行すると尿閉という尿が出なくなる状態③です。そのまま放っておくと、腎不全など命にかかわる病気につながることもあります。【図参照】

QOL疾患であるうちは、自身がどの程度困っているのかということが問題です。同じ症状であっても、その人の仕事内容であったり、社会的条件により困り度合いは異なります。ですので、排尿について何らかの苦痛を感じれば、泌尿器科の受診を考えましょう。

【図】前立腺肥大症によって起こること

❶尿道閉塞（そく）
尿が出にくくなる・途中で止まるなど
↓
❷蓄尿症状
膀胱が過敏になり頻尿になる
↓
❸尿閉（にょうへい）
膀胱の働きが落ち、残尿が増えた結果。放っておくと腎不全に



主観的・客観的に診断 投薬治療や手術を

病院を受診されると、まず何で困っているのか、主観的な症状を問診によって尋ねます。次に、症状の強さ、閉塞の度合いを見るため、尿流測定をして尿の勢いや、エコーで残尿がないかなど、客観的な状態を調べます。ただし尿の勢いを調べても、その原因が尿道が狭いからか、膀胱の力が弱まっているためかまでは分かりません。前立腺の大きさと尿道の閉塞度合い、また自覚症状は相関しないことが分かっており、診断が難しい部分もあります。

そこで、次の検査は内圧尿流検査というかなり専門的なものになります。これは尿道に管を入れて圧を測る特殊な機械を使い、患者さんの負担もあるので、本当に手術をして治療するべきかどうかなど判断するときに使います。

①②の段階であれば、基本的には投薬治療を行います。薬は前立腺を柔らかくするもの、膀胱の過敏さを抑えるもの、前立腺が大きくなるのを抑えるものという3種類があります。弱くなった膀胱を強くするのによい薬はないため、薬で治らない、また薬が飲めない場合は手術を勧めます。

早めの手術が膀胱守る レーザー治療も導入

手術によって閉塞している部分を取り除くことにより、膀胱にとって楽に尿を出せるようになり、弱っていた膀胱の働きが戻るということもあります。

膀胱のポンプの力が完全になくなってしまっていると、どれだけ手術で尿道を広げても力は戻らず、尿に管を入れて生活しなければならなくなります。ですので、早めの手術を行うことが、膀胱を守ることにもなります。

また、手術も、電気メスを用いる内視鏡手術が行われていましたが、最近はレーザー治療も取り入れ、より出血が少なく体への負担も少ない手術も行えるようになっています。

前立腺肥大症を持っている①②の段階の人が、何かをきっかけに急に③の尿閉へと進むことがあります。例えば、風邪薬や飲酒。また長時間の座位などで前立腺をうっ血させることもよくありません。

☆ ☆ ☆

排尿のトラブルは、「年のせいだから」と病院にかからない人も多くいます。昔は治療法も多くありませんでしたが、今は正しい診断をすればよい薬も、手術という方法もあります。気になることがあれば、日常生活でのいろいろな場面での支障を減らすために、気軽に泌尿器科を受診してください。